

安全な森林環境教育を目指して ～ボランティアと連携した取組事例から～

高尾森林ふれあい推進センター 久保 武典、木皿 仁志

1 課題を取り上げた背景

当センターでは、高尾山国有林をベースに森林教室や体験林業やネイチャークラフトをはじめ、体験型公募イベントなどを行っています。特に小学生を対象とした森林教室については、令和4年度には37件、参加者数は約2,613人となり、平成30年度の新型コロナウイルスの影響前を上回る状況となりました。(図1)

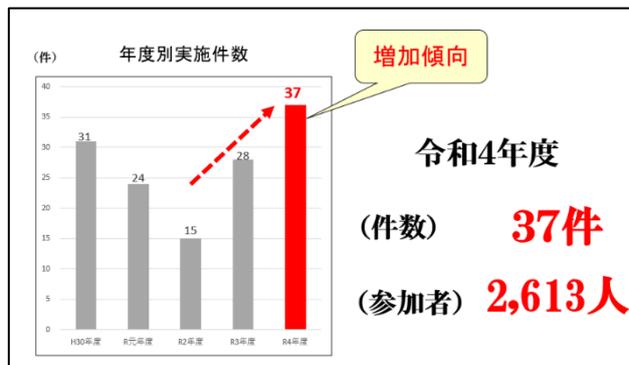


図1 森林教室の実績(過去5年間)

森林教室など森林体験学習においては、何よりも安全に実施することが求められます。特に都市部で森林とふれあう機会が少ない児童生徒

にとっては、体験学習での新鮮さや楽しさがある反面、林内では怪我や事故などが起こり得ることを体験活動の前に分かりやすく説明する必要があります。このため、児童生徒に対し単に「危ない」と言うだけでなく、林内で起こり得る「注意点をイメージ」させ、体験学習における児童生徒の成長の特性を踏まえた安全対策の進め方について、ボランティアと連携して取り組んだので報告します。

2 具体的な取組

(1) 課題

森林体験学習において、林内での注意点を周知するためには、あらかじめ児童生徒に対し何が「危ない」かイメージさせる必要があります。特に児童生徒の場合、大人とは違い説明に対する理解力が異なります。そこで、安全な森林教室を実施する課題として次の3点を取り上げてみました。

- ① 児童生徒は、林内では何が「危ない」のか理解されず注意力が散漫になること。
- ② 大人とは違い、「児童生徒の成長の特性を踏まえた注意の伝え方が必要」であること。
- ③ 当センターでは森林教室をボランティアと連携して実施していますが、安全に関する共通認識を持つ必要があり、「ボランティアスタッフと連携した安全活動」が重要であること。

森林教室では、林内での注意点を促しますが守られないこともあります。その原因には、「解説者が単に話して満足している」「つい専門用語で話してしまう」「児童生徒の反応を捉えていない」「抽象的な言葉だけで相手の頭の中に絵が浮かんでいない」などが考えられます。つまり、「抽象」を「具体」にして「言葉を映像化する」こと、「気を付けて」という言い方は、児童生徒は何に気を付けたらよいか理解し難いため、自分自身がその言い方に気を付けることです。これは、当センターの森林教室の実行スキーム図です。(図2)

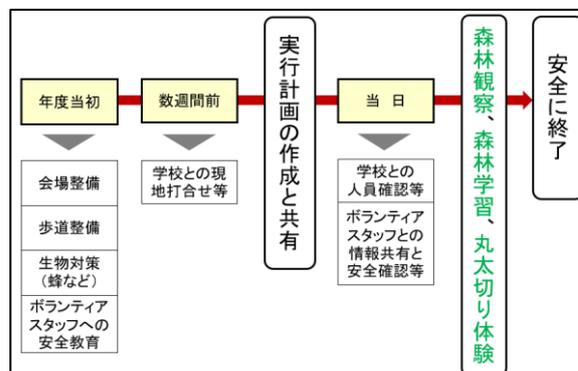


図2 森林教室実行スキーム図

年度当初は、会場周辺の歩道の整備、蜂の誘因捕殺の設置、ボランティア団体への安全教育を実施します。森林教室の数週間前には、学校側との打合せや現地確認、実行計画などを作成し職員と共有します。当日は、生徒の人員確認、ボランティアスタッフとの情報共有や安全確認などを行います。森林教室を行う組織体制では、解説者1名を先頭に、後方支援者1名、児童生徒10名前後を1つの班として行動します。

(2) 具体的な注意点の伝え方とは

林内活動では、児童生徒に対して具体的な注意点の伝え方があります。ポイントは、注意すべき「範囲を絞り言葉を映像化する」「イメージが湧くような行動を写真やイラストに示す」「映像は相手の記憶に残りやすい」「怖がらせるよりも、自発的に行動してもらうこと」です。(図3)

そこで、「五感」という感覚を意識しました。五感とは、人間が「目」「耳」「鼻」「舌」「皮膚」を通じて外界の物事を感じることで、危険をキャッチする重要なセンサーです。特に「視覚」は感覚の80%を占め、脳を刺激するともいわれます。(図4)

具体的な取組として3点を考えました。

- ・ 児童生徒の成長の特性を踏まえる
- ・ 視覚により具体的なイメージを増幅させる
- ・ ボランティアスタッフと連携し情報共有する

① 児童生徒の成長の特性を踏まえる

児童生徒は、低学年までの場合、

- ・ 「集団行動に付いていけない」
 - ・ 「個人の能力差が大きい」
 - ・ 「実物を見たことがない子供が多い」
- という特徴がありますが、高学年になると、
- ・ 「体力、運動能力が向上する」
 - ・ 「危険に対する判断能力が向上する」
 - ・ 「集団規律を理解するようになる」

など成長の特徴があります。(図5)

つまり、「運動能力が向上」すると危険回避の行動がとれるようになること、「判断能力が向上」すると危険性の有無を判断できるようになること、「集団規律が理解」されるようになるとルールを意識するようになります。

② 視覚により具体的なイメージを増幅させる

そこで、「視覚」により具体的なイメージを増幅させることを意識し、写真やイラストなどを活用して伝える取組を試みました(図6)。

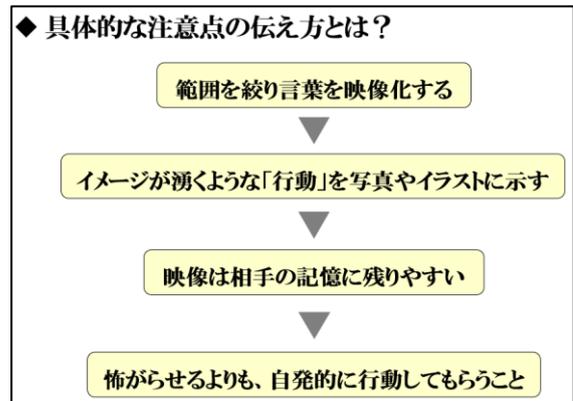


図3 具体的な注意点の伝え方

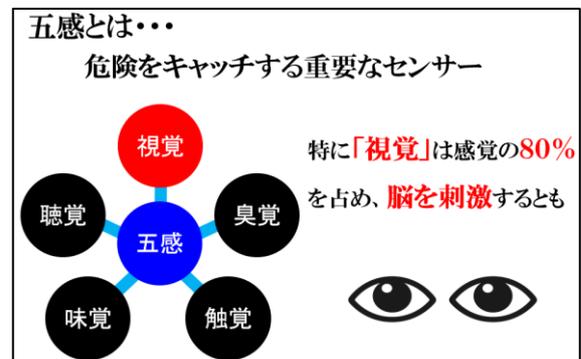


図4 五感について

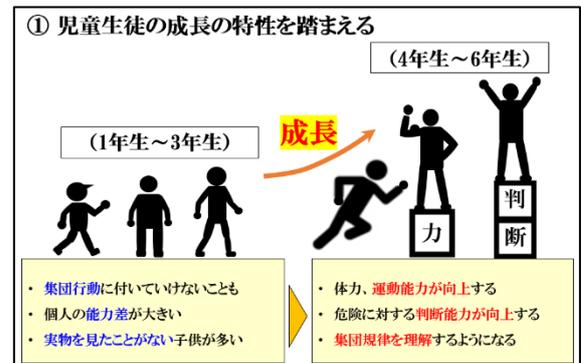


図5 児童生徒の成長の特性

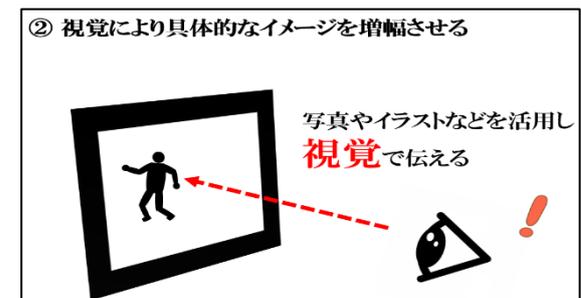


図6 視覚によりイメージを増幅

一例を紹介します。(図7)



図7 イラストによる林内での注意点の紹介

蜂の注意説明では、歩道沿いに設置した誘因捕殺の状況を見せ、スズメバチなどの大きさを見せます。(写真1) 児童生徒からは「予想よりも大きかった」「怖そう」など実物を見せることでより関心や注意が促されます。次に、丸太切り体験を行います。丸太切りの前には木の重さを体感できるようスタッフがサポートしながら丸太を持たせます。(写真2) その後、手鋸により丸太切りを体験します。(写真3) 児童生徒からは、木は「予想したよりもだいぶ重かった」「なかなか硬くて切れにくかった」などの感想があり、木の重さや質を肌で感じる体験になります。



写真1 誘因捕殺による蜂を確認



写真2 丸太の重さを体感



写真3 丸太切りで木の硬さを体感

③ ボランティアと連携し情報共有する

当センターでは、イベント等をサポートしていただくボランティアを年に一度募集し、職員と連携して取り組んでおり、この方々をフォレストサポートスタッフといます。年度当初には、このフォレストサポートスタッフに対し、イベント実施のための安全指導を行います。指導のポイントは、「児童生徒への伝え方、観察や気配り」「スタッフ間でのコミュニケーションの取り方」「具体的な事故防止対策」などです。(図8)

森林教室の当日には、「開始前のミーティング」「事故等発生時の判断の遅れがないよう常にコミュニケーションをとり、毎回各班の出来事を共有」「終了後には総合的な振り返り」を行います。つまり、安全管理のサイクルとして、現地検討やプログラム作成のため計画を立てます。次に学校関係者やスタッフと実行に移し、よかった点、悪かった点など分析や改善を図ります。(図9)

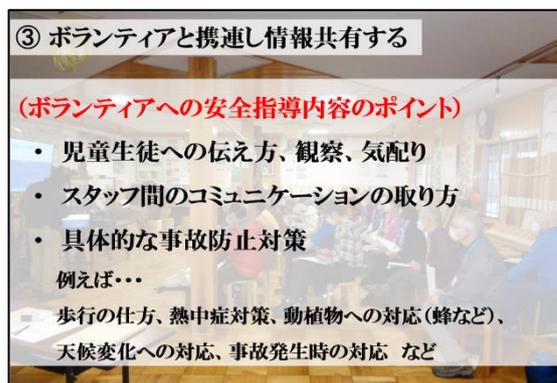


図8 ボランティアへの安全指導内容

3 取組の結果

このような取組の結果、児童生徒には以下の効果が現れました。

- 注意点がよく伝わりルールを守るようになったこと
- 児童生徒同士でお互いを注意する場面が多くなったこと
- 職員及びボランティアスタッフ間での児童生徒の様子や注意点が速やかに共有され、安全対策に生かされるようになったこと

4 まとめ

林内で児童生徒が安全に体験活動するための効果的なポイントは、

- 具体的な注意点を視覚により具体的に「イメージ」させることが安全に進める上で効果的であること。
- 児童生徒の判断力や運動能力の成長を踏まえ、突発的に発生したアクシデントがあった際には、自分の身は自分で守る（ハチの巣発見対応など）ことを意識させることも必要であること
- 職員とボランティアスタッフは、児童生徒の成長の特性を学び、振り返りによる些細なヒヤリハットや出来事などを情報共有し、安全対策を積み重ねること

などが効果的であることが分かりました。

引き続き安全な森林環境教育に向けて効果的な取組を進めてまいります。

5 参考文献

- ・海辺の安全対策マニュアル（海辺の自然学校懇談会）（国土交通省港湾局監修）

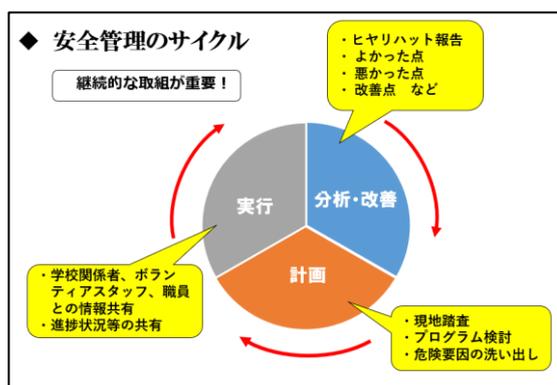


図9 安全管理のサイクル